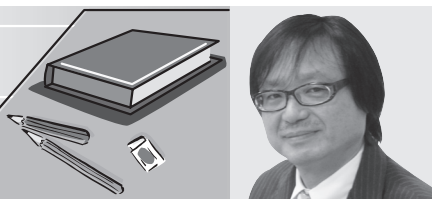


学生時代と図書館 80

— 想うこと、あれこれ —

石川 保茂



図書館。

そこには先人たちが屹立して、こちらを睥睨しているかに見えた。「どうだ、若造。我々の業績に歯がたつのかね。」と言わんばかりに。知の大海で、ともしればおぼれそうになる。探している何かがあるはずなのになかなかたどり着くことができない。遠い学生時代、そんな思いを抱えながら図書館に通った。

あのころの検索といえば、司書さん手書きの紙製のカードだったが、今はパソコンでピンポイント、ひとつ飛びだ。まるで新幹線のように高速で目的地に行き着く。それはそれで社会のあり方を便利に変えたが、窓の外を流れ飛ぶ景色を味わう余裕はない。

学生時代はよく道草をしたものだ。車で送り迎えをしてもらえる友達や、自転車通学の友達がうらやましかったが、今となっては通学途中の道草が懐かしい。春の草木の息吹、夏の草いきれ、秋の気配の虫の声、冬枯れの中の薄氷。道草の中にこそ発見があり、安らぎがあり、時には哲学さえもあることを、たいていの大人なら知っている。

日々忙殺される今でも、私はあえてパソコン検索に頼らないで、背表紙と語ることがある。「やあ、先人さん、元気ですか。」あえて新幹線に乗らない旅。鈍行の途中下車を繰り返す。

そういえば中島敦の小説に、識字によって生じる弊害、文字の魔力に気づいた学者が文字の書かれた粘土版で圧死する『文字禍』という小説があった。あの先見の明のあった学者の名はたしかエリバ博士だった。彼曰く「我々は文字を使って書きものをしているのではなく、文字の霊にこき使われているにすぎない。」

若造の私は文字による知を渴望しながら、文明・文化というものの「負の部分」に目を向けるようになった。あれは自分の勉強不足の言い

訳をするためだったか。今なお「負の部分」への思いがあるということは、今なお勉強不足ということか。

『文字禍』にも出てくる話だが、一つの文字をじっとみつめていると、それがアルファベットであれ、ひらがなであれ、その文字が解体して、意味のない一つひとつの線にしかすぎないものに見えてくる。それを心理学の世界では「ゲシュタルト崩壊」と呼ぶらしい。

勉強や探しものに疲れると、ときおりその「ゲシュタルト崩壊」の症状に見舞われた。ときにそれは文字のレベルを超えて人生全般にも及んだ。たしかに人生という言葉は知っている。でも「人生」っていったい何なんだ、という根本的な疑問だ。たしかに像を結んでいたはずの実体がバラバラにほだけ出す。目の前に次々に展開する一つひとつの事象の存在理由がとらえきれない。図書館の隅で、そんな青臭い思いにからめとられていた若造の「人生のゲシュタルト崩壊」を収束させてくれたのもまた、図書館であった。

若造はしかたなく本を読む。混沌とした知の世界に再び足を踏み入れる。巨大なジグソーパズルの初めの1ピースを置くように。そして一つひとつピースを並べていく。若造も白髪まじりになったころ、なんとかジグソーパズルの全貌が見えるような気がしてきた。『論語』で五十歳のことを「知命」と呼ぶのも宜なるかな、である。

留学時代、メルボルンで珍しく雪が降った冬の日のことを今でも思い出す。白い息を吐きながらいつものように図書館に入ると、いつになく先人達が温かく迎えてくれたような気がした。思えばあれが私の若造卒業の日だったのかも知れない。

いしかわ やすしげ (教授・MALL / CALL)